

2025 年 10 月 26 日 朝拝説教（第1、3礼拝）

「神のために大いなることを企てよ」
創世記 45:7,8

鄭 ヒムチアン

今朝は第二礼拝を親子礼拝として、子どもたちと保護者の方々がともにこの礼拝堂に集い、家族で礼拝をお献げいたします。この礼拝においても、私たちの教会に神様がお委くださっている子どもたちのことについて、御言葉からともに教えられたいと思います。

今朝はメッセージの聖書箇所として創世記 45 章 7,8 節を挙げましたが、創世記 37 章から記されていますヨセフ物語の全体を通して、学びたいと思います。メッセージの中でところどころ聖書の箇所を申し上げますので、その都度みことばをお開きいただければと思います。

ヨセフについて、皆さんよくご存知であると思います。ヨセフは父ヤコブが最も愛した妻ラケルから生まれた子でした。ヤコブは年寄り子であるヨセフを特に愛し、ヨセフにだけ特別な着物を与えました。しかし、この偏愛が兄たちの間に憎しみを生みました。さらにヨセフはそのような中で、ある時自分と家族に関する二つの夢を見ます。一つは、兄弟たちの束が自分の束にひれ伏す夢、もう一つは、太陽と月と 11 の星が自分にひれ伏す夢です。純粋に夢を語ったヨセフでしたが、兄たちはこれをヨセフが兄の自分たちを治める支配者になると受け取り、兄たちのヨセフに対する憎しみは頂点に達します。

ある日、兄たちが羊の群れを飼いに出ている時、父の言いつけでヨセフが彼らの様子を見に行きます。兄たちはこの機会に彼を殺そうと企てますが、長男ルベンの計らいで、殺す代わりに穴に投げ込まれます。最終的には、ミデヤン人の隊商に奴隷として売られてしまいます。それまで順風満帆であったヨセフの人生は一瞬にして急転落するのです。誰よりも父の寵愛を受けていた者が、兄たちより裏切られ、見捨てられて奴隷へと転落してしまうのです。これはまさにどん底への転落、苦しみであったに違いありません。このような出来事を経験したら、自暴自棄になり、人生を放棄しても不思議ではないでしょう。しかし、聖書はヨセフの人生がそうではなかったということを物語っています。

エジプトへ連れて行かれたヨセフは、そこでファラオの廷臣で侍従長であったポティファルという人の奴隷となりますが、なんとヨセフはここでなすことすべてをうまく成功させるのです。そして聖書はその理由をはっきりと私たちに伝えています。

創 39:2,3

- 2 主がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。**
- 3 彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。**

神様がヨセフとともにおられたので、ヨセフは成功する者になったとあります。ヨセフは兄弟から見捨てられ、家族とは強制的に引き離されたのですが、神様はヨセフとともにおられました。39 章には「主がヨセフとともにおられた」ということが 4 回も繰り返して記されています。ヨセフの境地は人間的には非常に辛いところにあったわけですが、神様は確かに彼を捕らえて、導かれたということをわたしたちに証しているのです。

それは他の人の目から見ても明らかなものでした。3 節を見ますと、ヨセフの主人であったポティファルが「**主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。**」と記されていますが、神を知らない者の目から見てもはっきりと「あ、この人には神がともにおられる」ということがわかったということでしょう。これは個人的な見解ですが、ポティファルが見てもわかったのですから、ヨセフ自身も神様が自分とともにいてくださっているということがわかったのではないかと思います。結果的にポティファルはヨセフに自分の家と、全財産を任せ、管理させます。

しかし、この後ヨセフに試練がやってきました。ポティファルの妻がヨセフのことを気に入り、彼にしきりに一緒に寝てくれと迫ってきたのです。しかし、38:8,9をご覧ください。主人の妻に対してヨセフがいった言葉です。

39:8 しかし彼は拒んで、主人の妻に言った。「ご覧ください。ご主人は、家の中のことは何でも私に任せ、心配せずに全財産を私に委ねられました。

39:9 ご主人は、この家の中で私より大きな權威をふるおうとはせず、私がするどんなことも妨げておられません。ただし、あなたのことは別です。あなたがご主人の奥様だからです。どうして、そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるでしょうか。」

ヨセフは主人が「家の中のことは何でも私に任せ、心配せずに全財産を私に委ねてくれた」と言っています。そして続いてヨセフが語っている言葉が印象的です。「**どうして、そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるでしょうか。**」と言いました。ヨセフは「どうしてこのようなことをして主人を裏切ることができるだろうか」とは言わないのです。もちろんこれは主人を裏切る行為になるとヨセフは当然知っていたはずですが、ヨセフは主人ではなく、ここで神様を意識しているのです。この言葉からわかることは、ヨセフは第一に何よりも神を恐れる者であったということです。神が自分を見ておられ、聞いておられることを意識して御前で生きる者でした。つまり、神がヨセフとともにおられたのですが、ヨセフもまた神を恐れ、神の御前を歩む生き方をしていたのです。

しかし、彼にまた苦難が訪れます。ポティファルの妻の嘘の証言によって無実なのに牢獄に入れられてしまいます。私たちはヨセフの人生を読んでいると、疑問を持つのではないのでしょうか。ヨセフは主の御前に誠実に生きる者であったのに、なぜ彼の苦しみは深まっていくのかという疑問です。これは私たちがヨセフの人生を見る上でとても大切なポイントです。聖書ははっきりとその理由を語っています。その理由は詩篇 105 篇 17-22 節に記されています。

この箇所は神様がイスラエル民のために結ばれた契約について、そしてその契約に対して神がなされたことを記しているみことばです。そしてここにヨセフのことが書かれています。

- 105:17 主は一人の人を彼らに先駆けて送られた。
ヨセフが奴隷に売られたのだ。**
- 105:18 ヨセフの足は 苦しみのかせをはめられ
その首は 鉄のかせに入れられた。**
- 105:19 彼のことばがそのとおりになるときまで
主のことばは彼を鍊った。**
- 105:20 王は使いを送って ヨセフを解放した。
諸国の民の支配者はそうして 彼を自由にした。**
- 105:21 主人である王は ヨセフに自分の家を任せ
自分の全財産を治める者とした。**
- 105:22 それは ヨセフが意のままに王の高官を縛り
王の長老たちに知恵を与えるためであった。**

17,18 節はそれぞれヨセフがポティファルの家で奴隷となったこと、そしてその後さらに牢獄に入れられる転落を記しています。そして 20 節に行くと彼がようやく解放されたことが記されていますが、ここで大切なのがその間にある 19 節のみことばです。この 19 節のみことばに、なぜヨセフが苦しみを受けたのかという理由がはっきりと記されているからです。

19 節 「彼のことがそのとおりになるときまで 主のことは彼を練った。」

「彼のことがそのとおりになるときまで」とありますが、この「彼のことが」とはなんでしょうか。これはかつてヨセフが兄弟たちにかたったあの夢の言葉です。麦の束の夢、星の夢、父と母と兄弟たちをヨセフが治めるという夢です。つまり、この夢がそのとおりになるまで、ヨセフは練られたということです。続くみことばは何がヨセフを練ったのかということを記しています。「主のことは彼を練った。」この主のことは何でしょうか？それは、これもまた主がかつてヨセフに与えられたあの夢の啓示であるでしょう。つまりどういうことか言いますと、ヨセフに兄弟たちに語ったあの夢のことがそのとおりになるまで、神様のことが、つまり神が示されたあの夢、その夢を実現へと向かわせる主のご意思と力が、ヨセフを追いやりヨセフを練ったのだということです。

これはヨセフの人生の過程を見るときははっきりと見えてくるものです。父の家に行ったとき、ヨセフは自分が見たくて夢を見たわけではありません。あの夢は神様がヨセフに与えられた啓示なのです。その夢は何を引き起こしたのか。兄弟の憎しみを引き起こし、結局ヨセフはこの夢のゆえに兄たちによってエジプトに売られていくこととなります。そしてさらに彼の人生は深みへ落ちていきます。奴隷となり、さらには無実の罪で牢獄に入れられてしまうのです。これは人の目には転落にしか見えないことです。しかし、神様はずっとこの夢の啓示を成し遂げようと働き続けておられたのです。ヨセフが奴隷となったのは、ファラオの廷臣であるポティファルの家でした。さらに彼が入れられた牢獄は王の囚人が入れられる牢屋でした。彼の人生は確実に王のもとへ近づけられて行くのです。

しかし、なぜヨセフは兄弟から裏切られ、売りとばされ、奴隷となり、牢獄にはいる必要があったのでしょうか。それは「練った」と言葉を通して私たちに教えられています。この練ったと記されている言葉は「精錬する」という意味の言葉です。精錬とは金属を高温で熱して、叩くことを繰り返し、不純物を取り除く作業のことです。ヨセフが練られたとは、鉄が熱され打たれるように、非常に大きなストレスと苦しみ、つまり兄弟に裏切られ、捨てられ、寵愛されていた父から引き離され、奴隷とされ、牢屋に入れられ、希望も期待も湧いてこない絶望に投げ出されたことでした。しかし、その苦しみを通して、ヨセフは練られたのです。神のことがヨセフを練りました。つまり、ヨセフに示された夢の成就のために神は苦しみを許され、与えられたということです。しかし、これは苦しめることが目的ではありませんでした。神のご計画をヨセフを通して実現することが目的であったのです。つまり、神様はヨセフを神様の器として用いることをお決めになり、神の器として練って整えられたのです。

実際にヨセフがこのことを通して神の器とされていることをみことばから確認することができます。やがて神の 때가満ち、ファラオが夢を見ます。誰も解き明かせないその夢を、ヨセフが解釈しました。そのときヨセフはこう言います。

41:15 ファラオはヨセフに言った。「私は夢を見たが、それを解き明かす者がいない。おまえは夢を聞いて、それを解き明かすと聞いたのだが。」

41:16 ヨセフはファラオに答えた。「私ではありません。神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです。」

後の日にエジプト王ファラオがヨセフを呼び、「おまえは夢を聞いて、それを解き明かすと聞いたのだが」と言うと、ヨセフは「私ではありません。神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです。」と答えます。ヨセフは夢を解き明かすことが決して自分の能力によるものではないと強く否定しています。神様が解釈されるのであり、自分は神様の道具であると語っているのです。確かにヨセフ自身が自分が神の器、神の道具であることを自覚しているのです。

それだけではありませんでした。ヨセフは苦しみを通して練られながら、徐々に神様が何を考えておられるのか、そして自分を神様は確かに用いて主のご計画をなさろうとしておられることを悟りました。

7 神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによって、あなたがたを生き延びさせるためだったのです。

8 ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。神は私を、ファラオには父とし、その全家には主人とし、またエジプト全土の統治者とされました。

ヨセフは自分の人生には確かに神様の導きがあり、神が自分をそのご計画のためにエジプトに使われ、用いてくださっていることを確信していました。神様のご計画は、アブラハムの子孫を生かすことであり、さらには世のすべての人々を生かすことでした。そして、ヨセフはその使命に確かに生きるものとなったのです。

ここまで、ヨセフの人生と、その生涯に神様がどのように関わってくださったかを御言葉を通して見てきました。このことから、私たちは教会に与えられた子どもたちをどのように育てていくべきか、三つの点からお話したいと思います。

①子どもをみる眼差し

1 つ目は私たちが子どもたちを見る眼差しです。私たちが子どもたちの存在をどのように考え、どのように子どもたちを見ているか、それが子どもたちへの接し方へと直結するからです。

ヨセフの物語から私たちが学ぶことは、「私たちが神様を信頼すればヨセフのように成功して、偉大な地位につける」ということではありません。そうではなく、ヨセフを通して私たちに語られている 1 つのことは、神様は人を作られ、そして人を創造され、その人一人ひとりにご計画を持っておられるということです。神様は確かにヨセフに計画をお持ちで、その計画をヨセフに夢として啓示してくださいました。そしてその示された夢の通り彼を導かれ、またその夢の実現の中で神様は彼を練って、彼を神の器と整えられていきました。ヨセフの人生とはもちろん違いますが、私たち一私たちの教会に与えられている子どもたち一人一人にも、その計画が確かにあるということです。

私たちは聖書にはっきりと記された神が人を創造されたということを信じています。もし私たちが偶然にできた存在ならば、それはたまたま生じたものであり、そこには目的がないでしょう。しかし、私たちが偶然ではなく、神によって作られたということは、そこに神が明確に意図を持って、そして目的を持って造られたというメッセージがあります。ですから私たちはまず子どもたちがこの世界に生まれて来たことに神様のご意図があることを見出したと思います。能力の有無や、健常児障害児の枠を超えて、この子にいのちを主が与えられた。そしてこの子に期待されている神様のご計画があるということに目を留めたいと思うのです。

ヨセフの兄弟たちはヨセフが夢を語ったとき、憎み、ねたみました。しかし、**創世記 37:11** にはこう書いてあります。**「兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心にとどめていた。」** 父ヤコブは夢の内容を語るヨセフの姿に傲慢さを覚え、彼を叱ったものの、ヨセフが夢を語ったこの出来事を心にとどめていたのです。

私たちは、ともすると、目の前で起きる出来事や、目に見える子どもたちの姿、成績、態度、振る舞いなどがすべてだと考えてしまいがちです。しかし、父ヤコブのように、子どもの言葉や姿の奥にある神様のご計画に心に留めたいのです。神様がこの子に何を期待しておられるか、この子にとってこの出来事は神様にあってどんな意味があるかをです。

②苦しみについて

二つ目は「苦しみ」についてです。子どもたちは様々な苦しみ直面し、多くの壁にぶつかります。しかし、ヨセフの生涯から学べるのは、苦しみの試練は神様の計画と相反するものではないということでした。むしろ、神様の計画が実現に向かうプロセスの中で、その試練自体が人を試し、鍛え上げる「炉」の役割を果たしたのです。

私の家族の話ですが、1996年、今から30年くらい前のことです。私の両親は日本宣教を志しまして、家族皆で日本に行く準備をしていたのですが、家族でのビザがすぐにはおりませんでした。そんな中で両親は観光ビザを使ってまずは日本に行くことを決め、私は2子上の兄と祖母に預けられて暮らすことになりました。私が小学1年生の時のことです。この時が私にとっては非常につらい時間になりました。祖母が私のことを嫌い、私はいろいろな仕打ちをされました。後でわかったことですが、このとき祖母は認知症があり、もの盗られ妄想や事実でない認識があつてそうしたことがわかりました。ただこの時は誰もそんなことを知らず、家にいる大人は祖母一人であつたので、私はそのような環境で家にいることが難しくなりました。学校から帰ると家に荷物だけを置いて、暗くなるまで外で過ごす日々を送っていました。

この時私を助けてくれたのは教会の大人たちでした。幸い家から教会が近かつたので、教会に行くといろんな話をしてくれたり、祈ってくれたり、美味しいおやつを食べさせてくれたりしました。しかし、決定的に私を助けてくれたは教会学校の先生でした。先生たちは毎週日曜日、教会学校の礼拝で私にみことばを語ってくれました。特に今日お話したヨセフの話、そして少年ダビデの話は特に印象的に覚えています。私はそこで神がともにいてくださるということを知りました。そして、その神様が私の神様となってくくださることを知りました。人には多くの罪があることを学びました。自分に罪があることも知りました。しかし、神様は救いの道を与えてくださっていることを知りました。私にとってこの一年生のときはつらい時でしたが、神様が生きておられること、そして人格的に神様に会う変えられない幸いな時となりました。

子どもたちが苦しむことがあります。しかし、だからと言って私たち大人が子どもたちに安易にその苦境から逃げさせたり、離れるように勧めたり、また、代わりに解決してあげたりするのは最善の方法ではないでしょう。主は愛する者を最後まで諦めず追いかけてくださり、私たちを精錬し整えてくださいます。それは創造された計画通りに生きてほしいと願っておられるからです。それが、その子にとっての「本来の自分」だからです。ですから、私たちは子どもたちが苦しみの中でも主のみこころを学びながら前進できるように励まし、そしてその苦しみにどのような意味があるのかみことばから教え、神がともにおられ導いてくださることを伝え、ともに祈り続けることが大切だと思うのです。

③子どもたちが神様の夢、志を持つことができるように

実はこの聖書のヨセフの物語はこの「夢、目標」に関して誤って解釈されやすいみことばであると思います。たとえば、このヨセフのみことばから「若者は夢を持つことが大事だ。」と受け取られることがしばしばあります。もちろん夢をもつことは大切なことです。しかし、その内実を見てみると、ヨセフのように神様を信頼すれば、立派になれる、社会の中で偉い人になれると言ったような個人の立身出世を目指す成功物語にすり替えられている場合があります。これは多くの場合「夢」という言葉が持つ同音異義語を混同してしまっている故のようです。ヨセフが見たのは寝ているときに見る夢でありました。しかしこれを将来の夢、目標として受け取ってしまうと混乱が起きてしまいます。

むしろヨセフが見た夢は神様からの啓示であつて、今生きている私たちにとっての啓示は「聖書のみことば」なのです。ですから私たちは子どもたちに主のみことばを伝え続けることが大切です。そして子どもたちがそのみことばから神様のみこころを学び、そして神様が私に何を期待しておられるか、私を何のために、誰のためにこの世界に生まれさせてくださったかそのご計画知っていくことが大切なのです。あえて夢という言葉を使うなら、「神様の夢」を持つことが大切なのです。使徒パウロがピリピ2:13で「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働

いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」と言っていますが、神様が私たちのうちに立ててくださる夢、志を持つのです。

本日の説教題を「神のために大いなることを企てよ」と題しました。これはインド宣教のために生涯をささげたウィリアム・ケアリーが残した言葉からとったものです。正確には彼はこう言いました。「神に大いなることを期待せよ。神のために大いなることを企てよ。」

先行きが不安な時代に子どもたちは生きています。しかし、そのような不安定な世界においても子どもたちが神様に期待し、神様のために生きる者として成長していくことを心から祈っています。何よりも神様を知り、子どもたち一人ひとりに与えられている神様からのご計画を見つけ、自らの使命として生きていくことができるように切に祈りましょう。土浦めぐみ教会の子どもたちが神様のために大いなることを企てる者となりますように。そして、その子どもたちを委ねられているのは、私たち大人です。子どもたちが神様からの使命を発見し、生きていくことができるように。私たちもまたどのように子どもたちを教会として育んで行くか真剣に考えましょう。私たちも神様のために、そして委ねられた子どもたちのために大いなることを企てるのです。

お祈り致します。